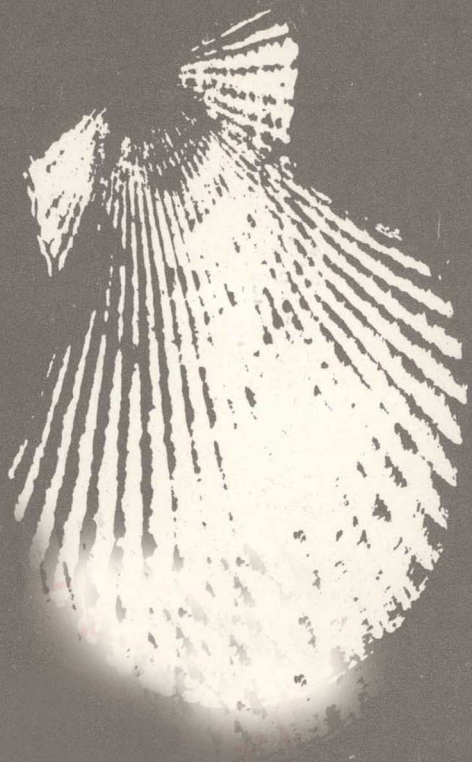
文藝春秋刊



吉村

海の奇蹟

海の奇蹟　定価五百六十円

昭和四十三年七月二十五日第一刷

著　者　吉村昭

発行者　上林吾郎

発行所　株式会社文藝春秋　東京都千代田区紀尾井町三　郵便番号 102

印刷所　大日本印刷　東京都新宿区市谷加賀町一ノ十二

製本所　中島製本　東京都文京区本駒込三ノ一ノ二十二

© 1968 Akira Yoshimura　Printed in Japan

落丁乱丁がありましたらお取りかえいたします

海の奇蹟

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

目次

海の奇蹟 5
白い道 63
野犬狩り 93
貝の音 153
透明標本 193

海の奇蹟

一

覗き桶の底には、ガラス板をとおして豊かな世界がひらけている。

ゆったりとその身をそよがせている若布の一叢があるかと思えば、耳朶のような薄い葉をせわしなく動かしているウミウチワの聚落を目にすることもできる。岩という岩には、フジツボ、紫ヒトデ、イソギンチャク、海栗などが刺繍でもされているように附着している。そして、それらの薄明るい森の中を、さまざまな魚たちの群が絶えず遊泳してまわっていた。

櫓を手にしている次郎は、ガラス板をのぞきつづける兄にねたましさに似た苛立ちを抱いていた。が、兄の鉤をあつかう技倆を思うと、ガラス板をのぞき込みたい願いもたちまち萎えてしまう。

次郎の家の漁区は、コイコロベという荒い外海に接した岬の先端にほど近い所にある。若布、海栗、タコ、アワビ以外、これといった漁獲のない部落では、住民たちの軋轢を避けるため、家

それぞれの漁区を厳重にさだめている。次郎の家の漁区が、外洋の波濤に洗われがちな海面をあたえられているのは、次郎の家が後から部落に加わった、いわゆるヨソ者の家族であるからなのだ。

しかし、兄の技倆は、その不利な条件を充分に克服している。大きく揺れるサッパ舟の上からでも、鉤は、入り組んだ岩礁の奥にひそむタコの体を的確に引きずり出し、若布を根元から傷つけずに引き上げてしまう。

それに、舟べりから身を乗り出しガラス板をのぞいている兄の姿勢は、狭いサッパ舟の空間に程よく適合している。兄の片足は、幼い頃波のあおりで舟から岩の上に投げ出されたため、膝頭がくだけ、その時から膝下の部分の成長がとまってしまっている。幼児のように細い脛、小さな足の甲。その脚が、くの字なりに舟底に据えられていることは、兄の舟べりにかがんでいる姿勢をひどく安定したものにみせていた。そして、鉤を獲物にかける一瞬、小さな足指は、そこが全身の力を発する個所でもあるかのように舟底の板の上できつくかじかむのが常であった。

次郎は、早朝と夕方、兄の一郎と漁区に赴くことを日課にし、時折兄の手を休める時間を利用してガラス板に眼を押しつけることを唯一の楽しみにしている。眼になじんだ青澄んだ世界ではあったが、絶えず生き生きと息づいている多彩な海水の生活が、この上ない新鮮なものとして眼に浸み入ってくる。海草のゆらぎもその日によってちがっていたし、魚類の訪れにも、必ずその都度異った新しい種属を見出すことができた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しかし、一月ほど前から、かれは、海底をのぞき込むことをやめてしまった。海底の一角に、白いものが住みつくようになったからだ。

その存在に初めて気づいたのは波の荒い日で、崖の下には、白く濁った水泡がおびただしく流れていた。

覗き桶から不意に顔をあげた兄の血の気のひいた表情は、今でもはっきりとおぼえている。眼は大きくみひらかれ、唇が激しくひきつれていた。

次郎は、兄の顔を見つめた。そして、ふと舟底に据えられた兄の短い足が痙攣しているのを眼にとめると、為体の知れぬ恐怖感におそわれた。

次郎は、無言で差し出された桶を手にすると、舟べりに膝をつき、ためらいがちにガラス板の中をのぞき込んだ。

見なれぬ白いものが、真下のかなり深い所に見える。

次郎は、目をこらした。それは、複雑に入り組んだ岩礁の奥深いくぼみに、海草の群にかこまれた大きな魚の死骸のように沈んでいる。

海草と同じ動き方でゆらいでいるのは、たしかに白いスカートの裾だった。そして、上半身は、密生した海草の中に突っ込むようにして埋れていた。

それから一カ月近く、死体は、その岩礁のくぼみに安住してしまったように同じ姿勢のまま動かない。凪の日には、澄んだ水を満した容器の底に沈められたトコロテンのように、舟の上から

もかすかにその存在をとらえることができた。

水死体の発見は、すぐに部落へ通報された。現場へも遺体確認のための舟が出され、部落の主だった者たちが招き集められた。

水死している女は、容易に推察できた。部落へは、日に一度国鉄バスが、鋭い山襞を縫いおびただしい谷をわたってやってくる。乗降客はほとんどなく、ただ部落がその通過する筋道にあたっているというだけで、申訳程度に停留所が設けられているにすぎない。

が、数日前、珍しく一人の若い都会風の女が、バスから降り立った。女は、村人たちの好奇にみちた視線を浴びながら、海沿いのペンキのうすれた停留標識のかたわらにたたずんで、海の方や部落のたたずまいを落着かぬようにながめていたが、やがてバスの去った方向にゆっくりと歩いて行ったのだ。

恐らく女は、部落の海に自らの命を断つ場所を求めてやってきたにちがいないが、その死体がコイコロベで発見されたことは、極めて自然な現象といっていい。

コイコロベとは、「恋ころべ」の意で、相添われぬことを悲しんだ男女がそれぞれ異った場所で入水したが、二人の死体はその崖下の海で寄り添うように発見された、という言い伝えから生れた名称だという。そうした故事からもあきらかなように、近くの海で水死した死体は、例外なく海水の流れに乗ってその崖下に運ばれると、入り組んだ岩のくぼみにはまり込んで、再び海に漂い出ることはないのだ。

部落の主だった者たちの集会は、村長の家の広い居間でおこなわれた。
自殺などという事故になれていない部落の者たちは、血の気の失せた顔で、水死体の身許の詮索や投身した場所の臆測を騒々しく交していた。かれらの間には、なんとなく好奇心にみちた興奮のようなものすら感じられた。しかし、その水死体の処置をどのようにすべきかということになると、次第にかれらの口は重くなった。
そして、さらに、一人の男が、
「やはり警察に届け出なくてはならねえのかな」
と、思いきったように口にすると、かれらの顔は一様にこわばり、うろたえたように互いの眼をうかがい合った。その表情には、臆病そうな困惑の色が濃くにじみ出ていた。
炉端に坐っている小柄な村長は、ひび割れた手で火箸をとると、無言で炉の中の灰をいじりはじめた。男たちは、不安そうな眼で火箸のえがく意味もない灰の筋を身じろぎもせず見つめている。多くは年老いた者ばかりで、かれらは、凍りついたように身を硬くして坐りつづけていた。
不意にかれらの上に訪れた沈黙の意味を、土間に立ったままの次郎は、幼いながらも充分に理解することができた。男たちの胸の中には、過去に受けた深い痛手が消えることのない根強さで残され、その記憶がかれらをおびえさせているにちがいなかった。
部落の初めての受難は、終戦の年の秋に突然起った。

その頃は、烏賊の群も沖合いで組織的な大型漁船の船団にあさられることもなく、部落の湾の中深くまで入りこんできていて、舟べりで焚かれる部落の舟の漁火が、海の上一帯を明るく彩っていた。

しかし、この獲物を前にして、戦争で多くの働き手を失った部落は、深刻な人手不足になやみ、海で働く者を雇い入れるために山岳地帯の奥深く人を派して、谷あいで点々と生活を営む炭焼きの家族の少年たちをあさって歩かせた。が、木炭も闇商人たちの手で高い価格で取引きされていたため、かれらは家業に忙しく、かなりの好条件をしめしてみても、それに応じる者は全くいなかった。

人集めを断念した部落では、仕方なく足腰のおぼつかない老人や子供たちまで動員して、浜辺の烏賊干し作業に従事させていた。

そんな或る日、奇蹟でも起ったように十人ほどの異様な恰好をした少年の一団が、部落の近くの山路に姿をあらわした。かれらは、一様に青黄色く痩せこけ、その癖ひどく行動的な瞳を落着きなく光らせて山路をくだってきた。

かれらは、部落の家々を眼近に見下せるところまでくると、山路から樹林の中にふみ込み、樹間をつたわって部落の中に下りた。そして、注意深くあたりをうかがいながら、海や浜に出はらった無人の家々に忍びこみ、野鼠の群のように手当りしだいに飯櫃をあさり、鍋の中に手を突きこみはじめた。

かれらは、大胆で敏捷で、そして小賢しかった。かれらは、家の裏口から裏口へと集団的に移動し、飯櫃や鍋をからにしながら果しなく食欲を満していった。

漸く、その異様な影に気づいた部落の者たちは、人々を集め得物を手にしてかれらを追った。が、少年たちは、組織立った訓練でも受けているかのように、部落の中を巧妙に逃げまわった。屋根に這いあがり家の中を走りぬけ、かれらは、飢えきった者とは思えぬほどの素早さで動きまわった。しかし、やがて部落の者たちは、地理に不案内なかれらを、海に突き出た平たい岩の上に追いつめてしまった。

襤褸のような衣服をまとったかれらは、大きな体をした少年を中心に寄りかたまっていた。両掌にしっかりと稗飯をにぎりしめ、おとがいの骨を動かしてしきりと咀嚼をつづけている幼い男の子もまじっていた。かれらは、例外なく敵意のこもった鋭い目つきで取り囲んだ人々の眼を凝視していた。

少年という概念からはほど遠いかれらの不遜な眼の光に、村人たちは当惑した。罪を犯した者特有のおびえの色も全く見られず、むしろ非難に満ちた眼の光があるだけだった。

村人たちが、ためらいながらも少年たちに近づきはじめた時、不意にリーダーらしい大きな体をした少年が、口をひらいた。

「おいらたちは、戦災孤児だ」

その声変りした押しつぶされた声には、或る傲岸なひびきがこめられていた。

部落の者たちは、その都会なまりの声に一瞬たじろぎ、戦災孤児という言葉に、足を釘づけにした。出征兵士、そして戦死者の遺骨の帰還といったこと以外、戦争というものの実態にふれたことのなかったかれらにとって、その言葉のもつ意味は刺戟的であったのだ。

漸くかれらは、少年たちの眼の奇異な光をおぼろげながらも理解できた。かれらは、素朴な好奇心をあらわにした眼で、それらの小さな戦争犠牲者たちの姿をあらためて凝視した。

初秋だというのに、衣服の破れ目からは骨の浮いた肉体がのぞき、履物をはいているものもほとんどいず、腕や顔にも裸足の足さきと同じように乾いた土埃の色がそのまま膠のようにしみついている。雑草のように伸ばされたままの髪。だが、かれらには、稀に流れこんでくる物乞いなどとは全く異った逞しい生命力のようなものが、体いっぱいに露骨にあふれ出ている。くぼんだ眼には、部落の者たちが目にしたことすらない動物的ななまなましい光が凝結していた。

村人たちは、無言のまま顔を見合わせた。人々は、眼の前に戦争という実体が、生のまま寄りかたまっているのを知ったのだ。

村人たちの眼からは、一様に罪人たちを追うという血走った光はいつの間にか薄らいでいた。

後から駈けつけてきた部落の主だったものを中心に、低声で意見がかわされはじめた。

談合の輪は、すぐにくずれた。かれらは、この島国の住民として、その戦争犠牲者たちを救う義務を課せられているような意識をいだきはじめたのだ。

部落の主だった者が、一歩前へ出ると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com